様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５９４

研究課題名（和文）日本語の格システムの変化とヴォイス交替：歴史コーパスを使用した実証研究

研究課題名（英文）Alignment change and voice alternation in Japanese: A corpus based study

研究代表者
柳田　優子（Yanagida, Yuko）

筑波大学・人文社会系（名誉教授）・名誉教授

研究者番号：２０２４３８１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本語の歴史研究の中でも、特に格システムの変化に焦点を当て、言語類型論の視点から研究を進めた。通言語的に格システムの変化はヴォイスの史的交代（対格型受動態から能格型他動詞など）がトリガーになる。上代日本語（８世紀頃）は、言語類型論的に活格型とよばれる格システムの特徴をもつ。平安時代以降の主格・対格型への変化の過程でヴォイスとの関係を明らかにするために、日本語歴史コーパス（国立国語研究所）Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (国立国語研究所、オクスフォード大学)から大規模なデータをとり、格システムがどのように変化するかの実証研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
我が国では日本語史は国語学の領域であり、日本語の枠内での伝統的な記述文法が主流である。言語類型論、生成文法理論の言語学的方法論を用いて日本語の古典資料を分析する試みは日本ではほとんど行われてこなかった。理論的枠組みを用いて古典資料の実証研究をすると、今まで日本語独自の変化として記述されてきた変化に、言語変化の一般性・普遍性に関わる現象が多く存在することがわかる。日本語は世界的にみても歴史資料のもっとも豊富な言語のひとつであり、言語学的視点から日本語史の実証研究を行う学術的意義は非常に大きい。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on changes in the case system from the perspective of linguistic typology, within the context of historical studies of the Japanese language. Cross-linguistically, changes in case systems are triggered by the historical alternation of voice (e.g., from accusative-type passive to ergative-type transitive verbs). Old Japanese (around the 8th century) exhibits characteristics of an active-stative case system. To clarify the relationship with voice during the process of change to the nominative-accusative system from the Heian period onward, I conducted an empirical study on how the case system changes by collecting large-scale data from the Corpus of Historical Japanese (National Institute for Japanese Language and Linguistics) and the Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (National Institute for Japanese Language and Linguistics, University of Oxford).

研究分野：言語学

キーワード：アラインメント　活格　心理使役交替　非典型的格表示　ヴォイス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は 2006 年上代日本語（８世紀頃）の語順の制約を発表して以来、日本語の歴史資料を使い、語順とアラインメントに関して言語類型論、生成文法の枠組みで研究を進めてきた。今日まで語順とアラインメントに関する問題は、理論的枠組みを超えて、もっとも関心の高い研究分野の一つである。アラインメントは言語の骨格のようなものであり、その言語の文法の根幹を特徴づける。そのため、アラインメントが変化するとその言語全体の文法体系に影響することが観察される。世界の言語は「対格型」「能格型」「活格型」の３つのタイプに分類できる。能格型と活格型は、動詞や名詞の意味により主語表示が異なる、「示差的主語表示(Differential Subject Marking（de Hoop 2009 参照)」を持つ。活格型は分裂自動詞をもつ能格型とみなし、活格と能格を区別しない研究者もいる。そのため、対格型に対して活格型と能格型は「非対格型」と呼ばれることもある。研究代表者は、生成文法理論・言語類型論の手法を用いて、上代日本語は活格型の特徴を持つことを提案してきた(柳田 2007，2014，Yanagida & Whitman 2009，Yanagida (2018)など)。上代日本語の属格「ガ」は，名詞階層の上位の名詞、そして、典型的には他動詞と非能格自動詞の動作主語(A)を表示する活格として現れ、非対格自動詞の主語(S)はゼロ格で表示される。このことは日本語の格システムが活格型から対格型へ変化したことを示す。また上代日本語は、目的語にも２つの表示体系（ヲとゼロ）がある。Frellesvig, Horn & Yanagida (2015), Frellesvig, Horn & Yanagida (2018)では Oxford Corpus of Old Japanese(OCOJ) (オックスフォード大学)を使用し広範にデータを収集し、上代日本語は「特定性(specificity)」で格表示が分裂する示差的目的語表示(Differential Object Marking （DOM))をもつ言語類型であること、そして DOM は平安時代以降には消失したことを提案した。

２．研究の目的

歴史言語学の分野では、言語のアラインメントは、歴史的に対格型から非対格型へ、あるいは、非対格型から対格型へと変化することが知られている。格変化のトリガーは派生自動詞である(逆)受動態が他動詞へと再分析される、いわゆる通時的なヴォイス交替である。もっとも広く知られているものに以下の変化がある。1）受動態＞他動詞(対格型＞能格型）(Allen 1950, Matthews 1952 など多数)、2）反使役(anticausative)＞使役他動詞(対格型＞能格型)(Bynon 2005)、3） 反受動態(antipassive)＞他動詞(能格型＞対格型)(Anderson 1988　など多数)、4）非人称心理他動詞＞非対格(活格起源 Malchukov2008) 、5）拡張仮説(活格＞主格)(Harris and Campbell 1995)。拡張仮説以外は、いずれも格変化のトリガーに通時的ヴォイスの交替が関係している。本研究の目的は日本語歴史コーパス(CHJ) (国立国語研究所)を使用して上代(8 世紀頃)から近世(17～18 世紀)まで広範なデータを集め、日本語の格システムの変化とヴォイスの関係を明らかにすることである。

３．研究の方法

アラインメント変化の研究は、歴史資料が存在するインド・イラン語派の対格型から能格型への変化の研究がもっとも重要な役割を果たしてきた。一方、比較言語学においては、オーストロネシア語族など同系統に属する言語の再建によって文献の残っていない

時代の言語や祖語を推定し、アラインメントの起源を復元する方法をとる。Starosta et al. (1982)以来、オーストロネシア語族のアラインメントの再建の研究が盛んである。アラインメント変化の重要な要因は「再分析(reanalysis)」と「拡張(extension)」である(定義はHarris and Campbell (1995: 50-51)参照)。受動態や名詞化(nominalization)などの構文が、より基本的な文に「再分析」されたり、動作主語(A)を表示する格が非動作主語(S)を表示する格へ「拡張」することによりアラインメントの変化が起こると考えられている。本研究は言語類型論と生成文法理論の枠組みからアラインメント変化の通言語的実証研究を行った。

(1) 言語類型論の観点からの比較研究

Benveniste (1952)以来、インド・イラン語派の能格型他動詞文の起源が、所有(possessive)構文か、あるいは受動態かは、長年大きな論争になっている。本研究では、インド・イラン語派の対格型＞能格型への変化とヴォイスの関係をこれまでの先行研究を中心に調査した。一方、日本語に関しては、日本語歴史コーパス(CHJ) (国立国語研究所)を使用し 8 世紀から 18 世紀までのデータを収集し日本語の活格型＞対格型の変化とヴォイスの関係を調査した。上代日本語における活格型の特徴は名詞化節に見られる現象である。通言語的に、日本語(Yanagida & Whitman 2009)、オーストロネシア語族(Aldridge 2011)、インド・イラン語派(Haig 2008)、カリブ語族（Gildea 1999）などに共通する変化は名詞化節の主文への再分析により、主語を表示する属格が能格また主格へと変化したことである。特に、オーストロネシア語族の属格＞能格と日本語の属格＞主格の逆向きの変化がどのようなメカニズムで起こるかについて考察した（Aldridge Edith (Academia Sinica) と共同研究)。

(2) **生成文法の枠組みでの理論化**

言語類型論も生成文法もその分析は通言語的な比較である。そして言語の多様性の背後には基本的な統一性と普遍性があるという、言語に関する共通した基本的考え方がある。しかし、言語類型論では観察される言語データの中に見出されるパターンを記述することが目的であり、それは経験的主張であり、説明的なものではない。生成文法ではヒトという種に生物学的に授けられた言語能力―いわゆる普遍文法―が存在し、言語の多様性はいくつかのパラメータの設定により生み出されるという理論的仮説を前提としている。本研究ではアラインメントの変化をパラメータ値の変化という視点から捉え、２つの問題を提起した。

（A）アラインメントはなぜどのように変化するか。

（B）アラインメント変化に言語間で共通する性質はあるか。

日本語とオーストロネシア語族の実証研究からアラインメント変化に関する普遍性と多様性を説明するための理論化を目指した。

４．研究成果

Harris & Campbell (1995:258)では活格＞主格への変化は活格が非対格自動詞の主語表示へと「拡張」することに起因する、いわゆる拡張仮説を提案している。しかし、拡張がなぜ起こるかについては何も述べていない。上代日本語では「ガ」は動作主を表示する格であり、主語が無生名詞、動詞が非動作自動詞の場合は「ガ」で表示されない。一方、16 世紀以降になると、無生名詞、非対格自動詞の主語が「ガ」で表示される割合が圧倒的に増える。伝統文法では主格ガの確立は名詞化節の主文への再分析（いわゆる連体形終止文)に由来すると言う説(柳田征司 1985 など)が広く受け入れられてきた。しかし、

名詞化節が主文に再分析されることによりなぜ「ガ」が非対格自動詞へ拡張するのか理由が不明である。本研究では、日本語歴史コーパスを使用して、日本語は歴史的に経験主が主語と目的語で交替する「心理交替」が使役交替の一部として捉えられる「心理・使役交替(Alexiadou & Iordăchioaia (2014))」を持つ言語であることを提示し、格システムの変化に通時的ヴォイス交替がトリガーになることを提案した。主格「ガ」の出現は、心理使役他動詞の反使役化により主語の原因主(causer)を表示する「ガ」が非対格自動詞の主語(S)へ「拡張」したことに起因する。通言語的に受動態などの斜格動作主(by-phrase)が能格へ再分析されることにより能格型他動詞が出現すると言われている。本研究での成果は、日本語の格システムの変化にも通時的ヴォイス交替がトリガーになることを示したことである。さらに、本研究では「非典型的格標示(Non- Canonical Case Marking(NCCM))」がアラインメント変化の付帯現象(epiphenomenon)として 16 世紀以降に出現したことを論じた。通言語的に NCCM は不安定であり、消失したり出現したりする。例えば、古英語は NCCM が存在していたが、中期英語で消失した。サンスクリット語には NCCM が存在しないが、その子孫である多くのインド語群では NCCM が存在する。いずれの場合も格システムの変化に伴う付帯現象として消失したり、出現したりすることが観察される。日本語やヒンディー語などの NCCM の共時的研究は多いが、通時的研究は非常に少ない。本研究では、生成文法理論の枠組みで格システムの変化に起因する NCCM 出現のメカニズムについて理論的側面から議論した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Yanagida Yuko	４．巻 12
２．論文標題 The origin of dative subjects and psych predicate constructions in Japanese	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Historical Linguistics	６．最初と最後の頁 282～316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/jhl.20023.yan	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Aldridge Edith and Yuko Yanagida	４．巻 38
２．論文標題 Two types of alignment change in nominalizations	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Diachronica	６．最初と最後の頁 314-357
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/dia.19044.ald	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Yuko Yanagida
２．発表標題 The psych predicate alternation and alignment change:The case in Earlier Japanese
３．学会等名 The 24th International Conference on Historical Linguistics（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 遊佐 典昭、小泉 政利、野村 忠央、増冨 和浩	４．発行年 2023年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 400
３．書名 言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題	

１．著者名 Frellesvig Bjarke and Satoshi Kinsui	４．発行年 2023年
２．出版社 Mouton de Gruyter	５．総ページ数 600
３．書名 Handbook of Historical Japanese Linguistics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関